

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「米トレーサビリティ法施行」
- 2) 「オンザロックで飲むアルコール」
- 3) 「“サブウェイ野菜カフェ”、西日本初の出店」
- 4) 「タニタ、熱中症を予防する簡易指数計」

1) 「米トレーサビリティ法施行」

2008年に発覚した事故米の不正転売事件をきっかけに作られた米トレーサビリティ法が7月1日施行された。米を使ったメニューや加工商品を提供する飲食店や小売店に、米の原産国の表示が義務づけられた。

1日以降に生産者から出荷、または輸入された米が対象。飲食店は、メニューに使う米の産地が客に伝わるように店内にわかりやすく掲示する必要がある。「〇〇国産を使用」とメニューに書いたり、看板を出したりする。「産地情報は店員にお尋ねください」といった掲示でもよい。

小売店で売るせんべいや団子、清酒などの米加工品にも原産国表示が必要になる。3カ国以上になる場合は、使用量が多い2カ国を示す。産地情報を載せたホームページや電話番号などの案内でもよい。違反した場合は50万円以下の罰金と定められている。

事故米事件では、国が一定量の輸入を義務づけられた米のうち、農薬やカビ毒で汚染された米が転売されて食用に回った。流通過程の不透明さが不正の温床と指摘され、再発防止策として同法が導入された。2段階で施行されており、昨年10月に取引情報の記録と3年間の保存が制度化され、今回、各取引で産地情報を伝えることが義務づけられた。

メニューの刷新や仕入れルートの見直しなど各業界対応がなされている。これ以上食品偽装の事件が起きないように、米だけでなく安心・安全を願いたい。

2) 「オンザロックで飲むアルコール」

麒麟ビールは7月27日から氷を入れて飲むビール「アイスプラスビール」を全国のコンビニエンスストアで夏季限定で発売する。ビールの新商品は約3年ぶり。節電での暑さ対策を追い風に、新しい飲み方を提案する。ビールは5度前後が適温とされるが、氷を入れると0度近くになる。氷が溶けると味が薄くなってコクが落ち、酸味や苦みを感じやすくなるという弱点を克服するため、かんきつ系の香りが特徴のカスケードホップを使うなどして濃いめの味に仕上げた。開発担当者は「バニラアイスを入れてもおいしい」と話す。

近年、ビール系飲料の新商品は、出荷量が伸びている第3のビールに集中しており、「本家」のビールは少ない。キリンでは2008年以来となり、新しい飲み方とともに売り出すことで、販売増を図る。店頭の設定価格は350ミリリットル缶入りで217円程度。

一方、サントリーとメルシャンは、1本1000円以下の手ごろな価格帯のワインに氷を入れて「ロック」にする飲み方を提案している。氷を入れると、13%程度のアルコール度数が6%程度に下がり、冷たさと相まってさわやかな飲み口になるという。

サントリーは全国約5000の飲食店で、カリフォルニアワイン「カルロ ロッシ」のロックを提供。メルシャンはカリフォルニアワイン「フランチア」をロックで楽しむ方法をホームページなどで紹介している。メルシャンは瓶より軽いペットボトル入りも販売し、家庭での夏のワイン需要拡大を目指す。

節電によって苦勞を強いられている企業もあれば、これを逆に商品を売り込もうという企業もある。節電を強制されたきっかけを考えると腹立たしいが、起こってしまった事態に対して不満を言うのではなくどうやってうまく乗り越えるかを考えることが重要だと思う。ただ、この節電による影響で次は「水不足」が起こらないか若干心配だ。

3) 「サブウェイ野菜カフェ」、西日本初の出店」

サブウェイの西日本初となる新業態店「サブウェイ野菜カフェ」が1日、大阪府中央区の商業ビル「ツイン21」内にオープンした。5月9日に開店した神田小川町店（東京都千代田区）に次ぐ2号店。

定番のサンドイッチや、野菜を使った限定メニューを提供。栄養価の高い野菜を紹介、販売する「マルシェ」も月1回開く。

今月中旬には静岡県立静岡農業高校の学生らが開発した野菜入りのスコーン（180円）も販売。30-40代の女性を中心とする健康志向の高い層をターゲットに「野菜の情報発信拠点」を目指す。

売り上げ目標は非公表だが、日本サブウェイは、来店客を1日350-400人と想定している。

出店場所がビジネス街で、観光地となる大阪城の近くという事もあり、ターゲット層の女性だけでなく、幅広い客層が見込めそうだ。

サブウェイは大阪府立大学内に野菜ラボを開く等、「野菜のサブウェイ」というブランドイメージを定着させる為にユニークな取り組みをしているので、これからも注目したい。

4) 「タニタ、熱中症を予防する簡易指数計」

記録的猛暑だった去年、熱中症患者が過去最高の1万3000人に上った。今夏も酷暑になりそうな気温と、節電志向からエアコンを控える動きもあり、熱中症患者の増加が心配される。そこでタニタは、熱中症を発症する危険度がわかる室内用の「簡易熱中症指数計」を発

売。置き時計としても使えるデジタル式と、単機能のアナログ式 2 種類計 3 タイプが用意されている。

これらは気温と湿度を計測し、日本気象学会の予防指数に合わせて「注意」「警戒」「嚴重警戒」「危険」の 4 段階で熱中症の危険度を示す仕組み。例えば気温 31℃、相対湿度 80%の状態は最高ランクの「危険」に区分されるが、デジタル式ではこの段階に達するとアラームで知らせる。換気やエアコンを入れる等部屋の環境を改善しないと、アラームは 1 時間ごとに鳴る。という。

この指数計は熱中症の危険がない環境でも「注意」と表示され、安全ゾーンはない。だが、「警戒」「嚴重警戒」と上がるにつれてリスクは高まるため、スポーツドリンクを飲む等、早い段階で対策が出来る。

国立環境研究所がまとめた 09 年の資料によると、熱中症になるのは自宅が多く、65 歳以上の人は約 5 割が発症している。高齢者は 31℃を超えると安静にしているでも熱中症になる可能性があり、簡易指数計は今夏の必需品になりそうだ。

高齢の人ほど体温の調整が難しくなっているため、注意が必要だ。これだけ「節電節電」と叫ばれている中でこの暑さが続けば、「我慢強い日本人」が仇となって、命を落としかねない。警告を出してくれるこのような機械があれば、我慢しなければという気持ちも少しは和らぐのではないだろうか。